

SOTOKU

崇徳学園同窓会
関東支部
会報
— 第32号 —

発行：崇徳学園同窓会関東支部 編集：支部事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷4-37-20

<http://sotokukanto.gl.xrea.com/> [mail:sotoku_kanto@yahoo.co.jp](mailto:sotoku_kanto@yahoo.co.jp)

ホテル機山館
TEL (03) 3812-1211(代) FAX (03) 3816-1218

新しい時代を創造しよう

— 幅広い人材教育の母校をみんなで支援しましょう!! —

崇徳学園同窓会関東支部会長 室崎 宏治 (昭和46年卒)

こんにちは。第31回総会より黒川 弘会長(昭和33年卒業)より引継ぎしました室崎宏治です。よろしくお願いたします。わたしは中学より崇徳学園にお世話になっておりました。京都大学に進学し、京葉瓦斯株式会社に勤めておりました。この会社は、柔道部が有名です。崇徳の卒業生も沢山います。

さて、数年のあいだに、世界は大きく変貌をとげました。東日本大震災や熊本大地震の復興がままならないうちに、1昨年の熱海の土石流や先日の石川県能登地方の地震が起き、数多くの台風が日本列島を縦断して、多くの人々が被災しました。世界では民族や宗教による対立が激化し、多くの難民が生まれて、各国のこれまでの協力体制や連携にひずみが生じています。イギリスの離脱交渉で揺れるEU、一国主義から脱却しようとしているアメリカ、流動化する東アジア情勢など、こういった世界の急速な動きのなかで、皆さんは何を考え、どういった決意を新たにしてきたのでしょうか。

いま世界を襲っている covid-19 のような、人類が初めて出会う病原体による感染症は、新興感染症とよべれます。比較的最近に限っても、後天性免疫不全症候群(エイズ)、エボラ出血熱、重症急性呼吸器症候群(SARS)、中東呼吸器症候群(MERS)など、人類はこれまで何回も新興感染症に見舞われてきました。一体これらの病原体はどこからやってきたのでしょうか。結論から言うと、野生動物です。様々な野生動物の中で共存していた病原体が、何らかの契機で人に感染し、やがて人から人へと感染するように適応変化してきたものです。実際、今では人類に特徴的と考えられている多くの感染症、たとえば、麻疹(はしか)、結核、天然痘、インフルエンザ、百日咳なども、過去数千年から1万年ほど前の間に、牛、豚、鳥などの動物から人に感染し、やがて人から人へのみ感染するようになったものと考えられています。これは旧大陸で人類が、人口密度の高い農耕定住生活を始め、牛や豚などの野生動物を家畜化していった時期に相当しています。カリフォルニア大学ロサンゼルス校のジャレッド・ダイヤモンド教授はその有名な『銃・病原菌・鉄』(Guns, Germs, and Steel) という本の中で、これら人類の感染症は、家畜化された動物からの「恐ろしい贈り物である」と言っています。その後数千年の間に、旧大陸の人類はこれらの病原体に対して一定の抵抗力を獲得しますが、現在でもまだ天然痘を除くほとんどの病原体は、完全には駆逐されていません。

旧大陸の人類は、1万年以上前から新大陸へも移動し、そこで定着していきました。しかし大航海時代に、軍馬と鉄製の銃を持った少数のヨーロッパ人の侵略により、新大陸のアステカ帝国やインカ帝国が16世紀に滅亡に至ったことはよく知られています。ジャレッド・ダイヤモンドによれば、実際は帝国滅亡よりかなり以前に、新大陸原住民の人口はすでに大きく減少しており、その主たる理由は、旧大陸人が持ち込んだ感染症でした。例えば、今のメキシコ地方に2千万人もいた新大陸人の人口は、旧大陸人が持ち込んだ天然痘の大流行によって160万人にまで激減したと推定されています。当時の新大陸原住民はまだ密集した農耕定住生活

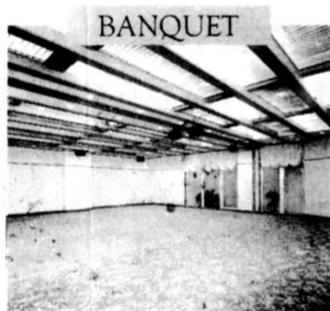
7月8日(土) 12:00より本郷三丁目に集まろう。

都心に近く、騒音に遠く交通至便の所
優雅・閑静本郷随一の

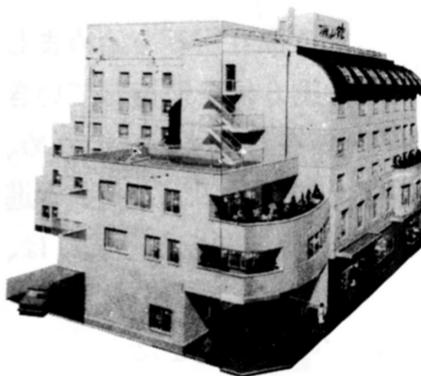
ホテル機山館

代表取締役 重本 康成
(昭和48年卒)

株式会社 機山館
〒113-0033
東京都文京区本郷4-37-20
TEL (03) 3812-1211(代)
FAX (03) 3816-1218



最新の設備を整えた宴会室。
大小5ヵ所の部屋(5名~150名収容)をご用意。
照明、音響など、どれをとっても重厚かつ格調ある空間づくりです。
会議室としてもご利用いただけます。



をせず家畜も持っていなかったもので、初めて遭遇した動物由来の感染症には全く抵抗性がなかったためと思われます。病原体が、地球レベルで人類史を大きく変化させたと言っても過言ではないでしょう。今回の新型コロナウイルスも、コウモリなどの野生動物由来と推定されていますが、まだ確定はされていません。しかしながら、かつての天然痘などとの大きな違いは、近年のグローバル化のなかで数百年単位ではなく、数ヶ月単位で地球上の全ての人類に広がったということでしょう。今、ポストコロナ時代の社会の有り様についての議論が盛んですが、はるか数万年の期間に及ぶ現生人類と感染症との長い戦いと共存の歴史に思いをはせてみるのも、意味のないことではないかもしれません。

生命に関する考え方も大きく変わりました。1 去年は中国でゲノム編集による双子が誕生し、デザイナーベビーに向けて生命倫理に関する議論が白熱しています。今年に入ってゲノム編集によるサルのコロンも誕生しました。日本でも iPS 細胞や ES 細胞を用いた医療技術が急速に進展し、人の臓器がブタの体内で作成される時代になりました。生命環境や人間観をめぐるさまざまな倫理的問題が浮上してきています。そこには、単に病気を治すというだけでなく、人間の命の始まりや遺伝的なシナリオに手を加えるという可能性が広く開けているからです。それは、社会の年齢構成や人生計画を大きく左右して、未来社会の動態に影響を与えます。また、医療がビジネスと結びつき、バイオベンチャーとして巨大な富を生み出し、世界の経済を動かす動因にもなりつつあります。私たちは今こそ、さまざまな生命の長大な歴史を振り返りつつ、生物としての人間、文化を持つ社会的な存在としての人間を総合的に見つめなおさなければなりません。

これからの社会は、Society 5.0 と呼ばれる超スマート社会です。そこでは ICT 機器が威力を発揮して人々や物をつなぎ、ロボットや AI が多くの仕事を代替することになって、互いの顔が見えなくなるかもしれません。しかし、そういった社会でこそ、人々が触れ合い、生きる力を発揮して世界と向き合うことが大切になると思います。世界は資本集約型や労働力集約型から知識集約型社会に変貌しようとしています。日本も東京一極集中型の経済から地域分散型の経済へと脱皮しようとしています。その動きを作るのは今からの課題と皆さんの力です。

これからの社会は、これまでにない人間観や自然観が必要です。先端的な科学技術にすべてを依存するのではなく、これまで時代遅れと見られてきた考え方を拾い集めて未来を見つめ直すことも重要になるでしょう。温故知新、ふるきをたずねて新しきを知ることは、ますます必要とされています。現代は情報技術やコミュニケーション技術が急速に発展し、いつでもどこでも、簡単に既存の知識にアクセスできるようになりました。膨大な映像が情報機器を通じて無料で流され、もはや、書物は知識を得る唯一無二の手段ではなくなりました。しかし、社会を先導するイノベーションには科学技術だけでなく、人文学、社会科学的な学知と共に確かな人間観が不可欠であり、それを総合的な学術研究の蓄積から見直さなくてはなりません。

現代の問題は、「将来は現在より良くなるはず」という希望を支える資本主義の原則、すなわち「経済成長は至高の善」という理念が崩れ始めているということでしょう。私が京都大学の学生だった 1970 年代初頭はまだ日本が高度成長時代で、すぐ先に明るい未来が見えているような気がしていました。大阪で万国博覧会が開かれ、科学技術によって次々に新しい可能性が切り開かれようとしていることが実感できました。しかし、やがて公害問題や温暖化などの環境劣化が地球規模で急速に進んでいることが明らかになりました。その後、「持続的な開発」が謳われ、地球の劣化を防ぐための国際協約がいくつもできました。地球の資源は有限であり、人間が発展する道には限界があることが共通理念となったのです。日本の産業界もパリ協定で謳われた SDGs (持続可能な開発目標) を基に企業倫理や戦略を掲げるようになりました。これからの社会には、地球規模で生物多様性や人間社会を包摂的にとらえる思考方法が不可欠になります。

崇徳学園には創造の精神を尊ぶ伝統があります。まだ誰もやったことのない未知の境地を切り開くことこそが、崇徳学園の誇るべきチャレンジ精神です。皆さんのなかにもさまざまな突出する能力を身につけ、すでにそれを発揮して活躍している方が多いだろうと思います。しかし、忘れてはならないのは、自分と考えの違う人の意見をしっかりと聞くことです。しかも複数の人の意見を踏まえ、直面している課題に最終的に自分の判断を下して立ち向かうことが必要です。

しかし、現代社会ではこの調和が崩れ、多様な考えを持つ人々の共存が危うくなっているのも事実です。皆さんもこれからの人生でこの難題に直面する事態に出会うことでしょう。そのとき、崇徳学園の自由な討論の精神を発揮して、果敢に自らの課題に向き合ってほしいと思います。皆さんがこれから示すふるまいや行動は、崇徳学園同窓会の一員として世間の注目を浴び、皆さんの後に続く在校生たちの指針となるでしょう。これから皆さんの進む道はさまざまに分かれていきます。しかし、将来どこかで再び交差することがあるはずで、そのときに、崇徳学園の卒業生として誇れる出会いをしていただけることを私は切に願っております。

現代は国際化の時代といわれます。皆さんの将来活躍する舞台も、日本という国を大きく越えて世界に広がっています。地球社会の調和ある共存のために、解決すべき課題がたくさんあります。自然資源に乏しいわが国は先端的な科学技術で人々の暮らしを豊かにする機器を開発し、次々にそれを世界へと送り出してきました。海外へと進出する日本の企業や、海外で働く日本人は近年急激に増加し、日本の企業や日本で働く外国人の数もうなぎのぼりに増加しています。皆さんがその流れに身を投じる日がやがてやってくると思います。そのためには、日本はもちろんのこと、諸外国の自然や文化の歴史に通じ、相手に応じて自在に話題を展開できる広い教養と、常識を疑いつつ真理を追求する気概を身につけておかねばなりません。理系の学問を修めて技術畑に就職しても、国際的な交渉のなかで多様な文系の知識が必要になるし、文系の職に理系の知識が必要な場合も多々あります。世界や日本

の歴史にも通じ、有識者たりうる質の高い知識を持っていなければ、国際的な舞台でリーダーシップを発揮できません。学校の学びだけではない、海外の文化や自然を自ら体得するフィールドワーク的な企画です。海外の多様な人々との対話を通じて、新しい学びの場で世界に貢献できる独創的な能力を育てていくことが必要だと思っています。

世界は今、資源集約型社会、労働力集約型社会から知識集約型社会へと変貌を遂げようとしています。そこでは情報が大きな価値を持ち、情報通信技術や人工知能（AI）が大きな力を発揮するでしょう。病気の早期診断や新しい薬の開発にすでにこうした技術が応用されています。膨大なデータからAIが病因を見つけ出し、適切な治療法を考案して適用し、やがて医療ロボットが的確で安全な手術を行うようになるでしょう。京都大学の山中伸弥先生のiPS細胞研究所では、iPS細胞を利用してさまざまな新薬の開発や治療方法の創出を実現しています。栄養価が高く、安全で収量の多い栽培植物や、成長が早く美味しい肉の生産にもこれらの技術が役立っています。自動運転を可能にするドライバーモニタリングシステムやスマートシティセンシング、カメラとAIを用いた商品識別技術、多言語自動翻訳技術、災害情報分析技術など、新しい技術が次々に生み出されています。それは私たちの暮らしを大きく変えるでしょう。2045年にAIが人間の脳を超えるシンギュラリティ（技術的特異点）の到達を予測する議論さえ行われています。

皆さんの多くは西暦2000年以降、すなわち21世紀に生まれた人達です。最近のロンドン・ビジネススクール経営学教授のリンダ・グラットンとアンドリュー・スコットによる“The 100-Year Life: Living and Working in an Age of Longevity”によれば、少なくとも我が国を含む先進諸国においては、西暦2000年以降に生まれた人達の半数以上は、100歳を超えて生きることになるだろうと書かれています。皆さんのご両親は20世紀後半に生まれ、世紀をまたいで生きてこられてきたわけですが、皆さんは丸々21世紀という世紀を生きていくことになります。その21世紀も最初の四半世紀をほぼ過ぎたわけですが、21世紀はこれから一体どのような世紀になるのでしょうか。国連経済社会局によれば、地球上の人口は昨年末に遂に80億人に達し、それは2080年代には約104億人のピークを迎えると推計されています。他方で私達人類は今、地球の気候変動とそれに伴う大きな地球環境の変化に直面しており、その進行は、大規模災害や食料・エネルギー問題を含め、社会・政治・経済のすべてにわたって、21世紀全体に及ぶグローバルな課題を突きつけてくることになるかもしれません。

100歳までの人生を生きていくということは、もちろん皆さんにとっては随分先の話であり、あまり現実味はないかもしれません。しかし、それは皆さんのこれからのライフ・ステージにとって、大きな変化をもたらすことになるでしょう。これまで私達のライフ・ステージは、大きく3つのステージ、つまり教育期（Education）、就労期（Career）、そして退職後（Retirement）に分けられてきました。そして今皆さんの多くは、この人生の第一のステージをまさに終えようとしています。これまで我が国の社会では、このライフ・ステージの移行は、かなり厳格に行われてきました。しかし、人生100年となると様相はかなり変わってくるようになるでしょう。先に述べた“The 100-Year Life”の中でグラットン教授とスコット教授は、21世紀を生きる若者たちの第二のステージ、つまり就労期は、単に延長されるというよりは、マルチ・ステージ化されることになるだろうと述べています。つまり、一旦就労した後でも再度一定の教育期に戻り新しい仕事に就いていくということが、次第に普通になってくるのではないかというわけです。

崇徳学園の教育の伝統は、創造的な研究活動の中での実践的教育であり、自らに課題を課し自学自習によりその解決に向け努力することを促すことによって、学生の創造的精神の涵養をはかることにあります。その前提となるのは、確実な科学的知識と幅広い豊かな人間的素養であり、人類が切り開いた叡智を学べる基礎学力をつけ、健全な知的市民としての成長を求めています。創造性の根源は知的好奇心と探求心であり、高度の専門能力を有した人材や次世代を担う創造的研究者が育っていくことを、強く期待しています。

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から自粛を続けてまいりましたが、感染症もようやく小康状態となり、3年ぶりに、規制が解除され、昨年は関東支部総会に親しい方々もお招きすることができました。本当に良かったと思います。

5月8日より2類から5類へ移行しました。9波が来ていると言う人達もいます。

147年の歴史を持つ崇徳学園は、新しい校舎も建設が出来、ハード面で新しく女子学生も入れる体制ができ、2020年4月より特別進学コースから受け入れを始め、2021年度から中学も含め全面的に共学になりました。これからの女性にも多いに期待できる所です。又、スポーツも期待できます。

「是直用官闕天、用錐指地也」（莊子 外編 秋水 第17）

【竹の管をのぞいても 天の広大さを知ることはできない】

にならないように銘記しましょう。

また、各面々で活躍されてる人たちとの同窓生つながりの場としての役割を果たして行きたいと思えます。

次回の機山館での関東支部総会で盛大に盛り上がりましょう。

（2023年5月10日記）



理事長あいさつ

崇徳学園理事長 奥田 耕造 (昭和40年卒)

同窓会の皆様今日は。コロナ禍が落ち着いて感染症法上の位置付けが5類に移行し、国内外旅行が楽になりました。しかし未だにコロナ感染者が広島県内では、人口10万人あたりの新規感染者数は72.61人(4月末)で安心とは言えず学園ではマスク着用を行っています。コロナ感染後遺症で苦しんでいる人も多い様で、個々のコロナ対策を心掛けましょう。

さて学園の近況ですが、共学も4年目になりつくづく共学にして良かったと思える様になってきました。具体的には学内の雰囲気明るく、清潔感が良くなり、授業中も一生懸命な姿が多く見受けられます。またクラブ活動が活発になり特に新聞部(男女部員200名以上)の活動はNHKや全国放送の民放、地元放送局、地元新聞等に大きく取り上げられて話題になっています。大学進路実績の向上も有り、先生方の頑張りが際立って見受けられます。

今年の7月8日、崇徳学園同窓会関東支部総会に呼んで頂き誠に有難う御座います。この素晴らしい機会に、昔話に花を咲かせ、お互いの近況を話し合い、再度繋がる事が出来心から嬉しく思います。卒業後は、それぞれの道を歩みなかなか会う事も出来ず、つつい疎遠になってしまったりもしています。そんな中今日、皆様が集まって下さった事は、私たちにとって非常に貴重で、有意義な時間となっています。また懇親会では食事などを通じて、美味しい物を共有し、心が温かくなる様な交流を楽しむ事が出来ました。温かい雰囲気に包まれた本日の総会、懇親会を支えて下さった皆様に感謝申し上げます。

最後に本日参加出来なかった皆様にも私たちの懇親会での想いを届ける為に、これからも繋がりを大切にして行きたいと思っています。

今日は本当に有難う御座いました。皆様の今後のご多幸を心から願っています。



校長あいさつ

崇徳中学校・高等学校 校長 松尾 耕司 (昭和58年卒)

同窓生の皆さまにおかれましては、日ごろより、本校教育活動に多大なご支援とご協力を賜り、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

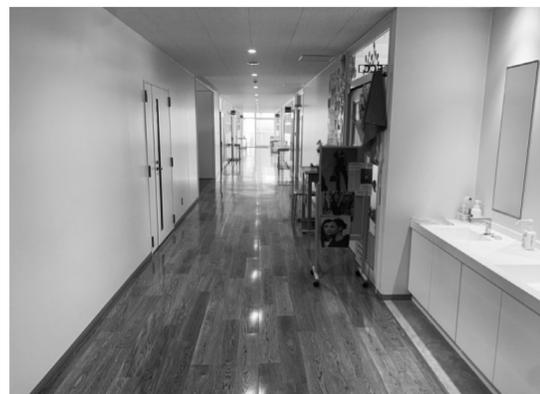
今年度につきましては、共学4年目を迎え、在籍生徒1659名(高校1561名・中学98名・男子1028名・女子631名)でスタートしました。高等学校においては、男女比率が(男子62%・女子38%)となり、学園の雰囲気も大きく変わってきております。しかし、建学の精神「崇徳興仁 務修礼讓」の教えを守り、生徒たちが「未来に向かってチャレンジ」できるよう、明るい学園を目指していきたい所存でございます。

昨年度におきましては、令和5年度大学入試において国公立大学合格者が75名(過年度生含む)となり、昨年度の66名を上回っております。また、私立大学の合格状況では、関東においては、早稲田大学・慶応義塾大学、関西においては、関関同立等の難関私立大学合格者も多数出ています。クラブ活動では、令和4年度全国高等学校総合体育大会柔道競技において、100kg超級で個人優勝、令和4年度全国高等学校総合文化祭において、新聞部が最優秀賞を獲得するなど、在校生たちは、文武両道で全国的な活躍を見せてくれています。

本校の教育目的につきましては、「Sotoku Prideをもって、未来を生き抜くことのできる生徒を育成する」を掲げています。それは、自分の考えで何事にも主体的に行動し、他者をリスペクトできるしなやかな心を持つこと。さらに、過去に学び、現在を知り、未来を考える手法を学ぶことと定義しています。目的の定義を明確化したうえで、必要な能力を教育目標に設定しております。

教育目標の『崇徳学園 Graduation Policy (崇徳GP)』は、どのような生徒を育てたいかという目標の実現に必要なものとして8つの力(思考力・自己肯定力・発信力・行動力・コミュニケーション力・協働力・分析力・創造力)を掲げ、それを「崇徳GP」として謳っています。教育目標を「育成したい力」にまで読み下したことで、目標が具現性を帯び、皆が理解し、常に意識することができるのではないかと考えています。

最後になりますが、本校の建学の精神はどのように環境が変わろうとも普遍的なものであり、人生の道標になるものと信じております。この建学の精神を礎として、私立学校としての存在意識を高め、生徒、保護者や地域の方がたのご期待に沿えるよう教職員一丸となって学校教育を進めてまいります。同窓会のますますのご発展とご健勝を心から願っております。



同窓会 新会員の歓迎ならびにクラブ活動での活躍!!

崇徳学園同窓会会長 **松田 宜久** (昭和 61 年卒)

母校同窓会関東支部の皆様におかれましては、益々のご健勝にて活躍のことと拝察いたします。日頃より同窓会の運営にご支援ならびにご協力いただき深く感謝申し上げます。

現在同窓生は 5 万名近い人数となりました。令和 7 年には学校創立 150 年を迎えます。これも偏に学校関係者の皆さんや先輩方のおかげだと私は思います。

今年度私も会長になり初めて卒業式の前日に開催されるクラブ表彰式に参列させて頂き改めて崇徳学園の広島におけるクラブでの活躍に敬意を払う次第でした。その際には卒業と同時に皆さんも同窓会の会員なるわけですのでどんな時でもこれからも母校である崇徳学園とつながりがあるんだという事を忘れないでください、そのために我々同窓会があることを忘れないでください、全国にはおおくの先輩たちがいます、何かあれば先輩たちを頼って下さい、本校同窓会の新会員への入会を歓迎しますと述べさせて頂きました。

今年の卒業生は本校に入学され卒業するまで、新型コロナウイルスの影響によって我慢を強いられる 3 年間だったと思いますが、そうしたなかでも会報誌にも掲載されてますが生徒達は沢山の全国大会に出場し表彰されました。

そうしたなか、令和 4 年度第 2 回メイプル賞に団体ならびに個人の部でも崇徳高校のクラブが表彰されたことを紹介させて頂きます。

メイプル賞とは、学校教育、社会教育、体育、スポーツ、文化等の分野において、広島県教育委員会が全国規模で優秀な成績を納めた団体・個人を表彰する制度で、毎年春と秋の 2 回あり、第 2 回で受賞された 13 団体が紹介された。(個人では 25 名) 団体では新聞部が第 46 回 全国高等学校総合文化祭新聞部門 最優秀賞を取り受賞、個人では柔道部、高原君が令和 4 年度全国高等学校総合体育大会柔道競技大会・第 71 回全国高等学校柔道大会において 男子個人 100kg 超級 優勝し受賞

今回は崇徳学園同窓会も受賞おめでとうとお祝いメッセージを朝日新聞に掲載させて頂いたことを併せてご報告させて頂きます。

最後になりますが学園の益々の発展に同窓生の皆様と共に支援していきたいと思っております。関東支部の皆様の今後のご多幸を祈念しご挨拶とさせていただきます。



多文化共生研究部

顧問 **久保 成史** (平成 6 年卒)

多文化共生研究部は、日本以外の国にルーツのある生徒を集め、それぞれの国の文化や社会の紹介をすることによって、現在日本で求められている多文化共生社会への理解を広めていこうとする部活動です。主な活動は、崇徳祭において研究内容をまとめたパネルや文化を象徴する器具や楽器などの展示をすること、他校の同様の活動をしている部活動や生徒との交流会でディスカッションや学習会、調理体験などを行うことです。従前は、コリアンルーツの生徒が多かったのですが、崇徳学園も共学化を果たしたのに連動してか、中国ルーツの生徒も増えており、また、現在はペルールーツの生徒もおり、顧問も広島の社会が変わってきていると感じます。生徒個々が軋轢や差別に負けず、ルーツに誇りを持ち、彩り豊かな社会の構成者となれるよう願ってやみません。

書道部近況報告

顧問 **房尾 昭江**

現在、中学生 7 名、高校生 13 名の計 20 名で活動しています。文化祭では個人の作品だけでなく、パフォーマンス書道で作成した作品を飾りました。12 月ごろからは、高校第 3 学年の先生方に生徒たちに向けた一言を書いていただき、それを各部員がデザインした模造紙に大きく書いて卒業式当日に各教室の壁に貼りました。

校内での活動だけでなく外部での活動も盛んに行っています。2022 年は広島筆センターに書道部員合作の作品を展示していただきました。また、展覧会への出品も継続的にしており、入賞する生徒もいました。今後も個人の技術の向上に励み、目標に向かって前進していこうと思います。

水泳部近況報告

顧問 菅原 裕介

水泳部は現在、男子水泳部 23 名にマネージャー 3 名を含む女子水泳部 12 名となり、総勢 35 名で大会への参加を中心に活動しています。多くの選手が校外の水泳クラブに所属しており、そこで日々練習に励んでいます。

新型コロナの影響が心配されましたが、部員達は中国大会や全国大会の入賞に向けてそれぞれ自己のベストを更新すべく力泳を見せてくれました。

チームとしてインターハイに多くの選手が出場を果たすと、その後に開催された全国 JOC ジュニアオリンピックカップにおいて、女子 50 m 自由形で全国 8 位に入賞しました。また、高 1 の選手も中国大会において、個人メドレーの 2 種目で連覇するなど目覚ましい活躍を見せ、来年度の春に開催される日本選手権大会への出場を決めました。

部員達は部活動と両立させながら勉学に熱心に取り組んでいます。卒業する高 3 生の多くは国公立大学に合格することができました。今後も部として文武両道をモットーとし、日々の時間を大切にしながら計画的に努力を積み重ねていく活動を続けていきたいと考えております。

理科部近況報告

顧問 前島 哲也

三年前から本校も男女共学になり、クラブの名称も中学生を含めて「理科部」と代わり、活発で賑やかに活動しています。現在、高校理科部の部員は 3 年生が 7 名、2 年生が 7 名の計 14 名（内女子部員 5 名）になりました。以前は水曜日の放課後だけの活動でしたが、昨年途中より金曜日の放課後も活動日に付け加わり、より多くの実験を行っています。その内容も部員たちが自ら計画を立てて準備し、実際に実験を行って確認するといった主体的なものにすることができました。また、上手くいかなかった場合も、なぜ上手くいかなかったのかその原因を探り、修正後、再度実験し直すといったような科学的な考え方を意識しながら日々精進しています。

近年、唯一の発表場である「崇徳祭」もコロナウィルスの関係で生徒だけの限定的な開催しかできませんでしたが、昨年は三年ぶりに以前と同じような形で行うことができました。ただ、久しぶりのところもあり、実験を中心に行いました。中でも「巨大な泡の発生実験」通称「象の歯磨き粉」は来場者の注目を集めました。また、いろいろな色に変わる「炎色反応」や独特な金属の形をつくる「ビスマスの結晶」などは好評を博しました。

今年は部員たちのアイデアを基にさらに工夫を重ね、より華やかなものにしたいと考えています。

空手部近況報告

顧問 笠原 弘

コロナウィルスの影響もあり、空手道部に所属する部員数は全国的に減少しており、本校でもここ数年は少人数（1～5人）で活動しております。経験者を集めた学校が大会で活躍するなか、本校においては、初心者から始める部員が多く、段位獲得や大会に向けて練習に励んでいます。広島県全体の技術講習会や合同練習など、他校との交流の機会も多く、この 1 年では高水高等学校、朝鮮高級学校、山陽高等学校などにお世話になりました。

過去には 2012 年に団体組手で全国選抜大会に出場したこともあります。こうした状況のなかで、ここ数年の大会実績においては、県大会で個人組手 2 回戦までがほとんどです。

共学化に伴い、令和 4 年夏、初心者ではありますが、初めての女子部員を迎え、文武両道を実践すべく、毎日一生懸命頑張り、新人大会の組手で中国大会の出場権をを獲得しました。

練習場所は学校の古い部室棟の 1 室を部室兼道場として使わせてもらっております。基本練習から組手、形が日々の練習ですが、掛け声などに英語その他の外国語を使ったり、簡単な護身術を鍛錬したりするなど、独自の練習を取り入れています。本校空手道部の活動の特徴として、レクリエーションを行ったり、広島らしいものの体験をしたりしてきました。具体的には、瀬戸内の海風を浴びながらのランニングや、お好み焼き体験やバームクーヘン作り、合宿先での地域での清掃活動の参加などを行いました。卒業後、地元広島をふり返る機会に何らかの役に立てればと思います。

他のクラブではなかなか体験できないこともあり、多様な目的をもって空手道を始める生徒たちがいます。組手の団体戦が従来の 5 人制では出場校数が少ないため、昨秋から 3 人制も新設されました。まずはそこに出場できることを目標に練習を積んでいきます。